

を考察し、他方、パソコンなどの技術を習得し、その活用をはかる。

- 「総合社会」……（ねらい）現代における日本の都市化社会の特色と諸課題、高齢化社会と社会福祉、国際社会の変容と日本の立場など、変動の著しい現代社会に近未来の立場から逆に焦点を当て、日本人として生き方を考える。資料を収集し、それに基づいての討議中心の学習とする。

#### (7) おわりに

提案した各科目は、全体としてまとめると国際理解と表現することもできる。また、高等学校学習指導要領第1章総則の第2款の備考の1により「その他の科目」とすることも可能と考えている。現在の若者に接し、近未来の日本の姿を思い画くとき、問題があまりにも多すぎると思うのは私だけであろうか。高校の社会科教育を取り上げてみても気がかりなことが多い。しかもそれら問題点の責任の一端は、教員養成にあたる大学側にあることを自覚すべきではないだろうか。

#### <注>

- 1) 東京都立大森高校：「類型の設置」高等学校教育改善推進校第二年度報告書。東京都教育庁指導部。昭和61年3月

## 8 生涯教育の視点からのカリキュラムの構想

馬 居 政 幸 (静岡大学)

### (1) 生涯教育（論）の現況

周知のように生涯教育（論）が現代的課題として提起されたのは、ラング

## II 社会科カリキュラムの歴史的背景と展望

ラン等による1965年ユネスコ「成人教育推進会議」での提案・討議を契機にしてである。以後、日本でも主として社会教育行政を中心にその具体化が志向されてきた。それが今日、臨時教育審議会の審議経過や答申を通じ教育改革の中心課題として改めて注目を集めるようになった。

本来、生涯教育の視点は単に学校後や学校外のみでなく、学校教育自体の改革を含むものである。しかし今日でも、学校教育に対しては総論的な理念の提示にとどまり、特に教科カリキュラムレベルにおける関心は低い。

もちろんこのことは、生涯教育（論）が全く学校教育において無視されてきたということではない。情報化への対応、基礎・基本の重視、自己教育力の育成等、実質的に生涯教育（論）を構成する要素は、学校教育の今日的課題として研究・実践が積み重ねられてきている。いずれもまさに現代の社会科教育が当面する課題でもある。だが、社会科の場合も含め、それらが「生涯にわたり統合された教育 Life-long integrated education」という観点からどこまで意識化され総合的に進められているかは疑問である。

したがってここでは、まず問題を明示するため、学校教育への視点から生涯教育の観点とその社会的背景（それは社会科教育が対象とする社会の変化でもある）を整理し、それに基づき、カリキュラムを構想するための観点と社会科教育の課題を提示したい。

### (2) 学校教育にとっての生涯教育（論）の社会的背景

高度産業化や情報化と総称される社会の急激な変化により、学校教育におけるカリキュラムの内容を構成する知識・情報は、質的にも量的にも、またそれにアクセスする方法の次元においても、学校外への優位性を失いつつあるといえる。（学習対象の変化）

他方、上記の社会過程は、地域を解体させ家庭を小規模・個別化させることにより、学校外の教育環境に対し、知識・情報量のみ増加させ、一人の生活者や社会人として育成する機能を衰退させた。逆に、学校がその機能を代

行せざるをえない状況にある。しかし、学校は本来そのような機能を担うために制度化されたものではない。(学習の場の変化)

このことは、子どもにとっては、学校外で獲得する知識・情報の量が飛躍的に拡大したものの、生活者として必要な文化・技能・規範を学ぶ場が縮小したことを意味する。(学習主体の変化)

通常、生涯教育の視点から学校教育では、学校教育後の学習への統合を前提とした、不易としての基礎・基本的知識の学習と、変化に適応する自己管理的学習能力の育成が課題とされる。これ自体を否定するわけではないが、それは従来の学校教育の延長線上での「学習対象」の変化に対応するのみではないか。言い換えれば、その前提となる「学習主体」や「場」自体の変化により、いかなる知識・能力の基準もそれが一定の固定した枠組みにより把握されたものである限り、可変的・相対的であることを避けえないであろう。

今日、生涯教育を理念とする学校教育の課題は、教授＝学習過程のみでなく、その全体としての制度・構造上の次元に及ぶ改革を志向しつつ、まず、学校を単一の独立した教育機関としてではなく、地域・家庭を含めた子どものトータルな人間形成の場としての教育構造のシステム化の核としてとらえることから始めることである。このような視点からカリキュラムを構想する際に必要と考える観点について次に提示したい。

### (3) カリキュラムへの視点

#### (a) 個々の子どもの日常生活からの発想

カリキュラムの構想は、まず、なによりも学習主体である個々の子どもの生きる多様な日常生活の把握から出発しなければならない。ただ、それは単なる児童中心主義でもなければ子どもにおもねることでもない。マスコミ・交通・通信等のコミュニケーション手段の質的变化、第一次産業就業者が一割を切り、七割以上が雇用者である社会での家族の人間関係、職住分離と移動が常態化した地域の変質等、子どもの現実を構成する状況に即した課題・

内容・教材が創造されねばならないことを意味する。

#### (b) 学習の方法・手順の重視

科学的方法の学習を代表として学び方を学ぶとよくいわれる。しかし、より重要なことは、科学的方法以前の学ぶこと自体へのアイデンティファイである。それは科学を含め特定の方法の学習ではなく、学ぶ意欲・喜び・成就感・必要性等の内的な構えの育成とセットになった課題追求という意味での方法の学習である。そのためには、それらが、子ども単独や子どもと教師との関係のみでなく、仲間等の多様な他者との相互学習の過程において創造・形成されることが重視されなければならない。

#### (c) 学習の統合・総合性の重視

社会の情報化により知識の更新と複雑化が進むほど、その一般化のために体系性・系統性は追求されねばならない。その意味で教科に代表される系統学習はますます必要である。だが、それに応じて、認識の個性化・具体化・生活化がより重要な課題となる。そのために、教科の学習の導入(知識の前提にある経験)―過程(知識への動機・定着)―結果(知識の統合・内化)において、学習主体の日常生活に根差し―かかわり―還元され、また子どもの生活の不断の再創造に生かせる学習の場が用意されねばならない。

#### (d) 知識の相対性、価値の多元化を前提とした正当性の基準

社会の産業化とその高度化は、価値の多元性を前提とする。その意味で事実判断に基づく正しさと価値判断に基づく善さの基準は、学校教育においてこそ厳密に区別されねばならない。しかし、他方で一人の人間として両者をいかに統合するかがより重要な課題となる。そのためには、まず、いかなる知識・技能・態度の学習にあっても、正しさと善さの基準の峻別とその条件の学習が必要である。他方、学習主体の判断に対して開いた構造の問いと答えからなる学習を組み込んだカリキュラムが構想されねばならない。

#### (e) 教室外、学校外の教育力の活用・活性化

以上のような課題を具体化するためには、そのカリキュラムは自ずと、教

室・時間割の枠を柔軟にし、学校の外をも含み込んだものにならざるをえないであろう。他方、地域の教育力は学校での学習の場に活用・統合されることにより真の活性化が可能となろう。さらに、子どもたちが生涯学ぶ場とは、地域とそこに住む人との関係である。その意味で、学習対象・過程・表現・創造の場として、また教授主体としても、さらにこのようなカリキュラムを構成する過程自体に、各種社会教育機関にとどまらず、父母・家庭も含めた多種多様な地域の教育力を取り入れることが必要である。

#### (f) 発達課題への視点の柔軟化

生涯教育においては、幼児期～老年期とそれぞれの発達課題に応じた学習が必要であるとされる。当然、カリキュラムを構想する上で、子どもの成長・発達課題を解明、考慮することは重要だが、それは歴史的・社会的に相対的な類型であり、学年単位に普遍化するほどハードな構造をもったものではない。重要なのは、それらを一つの基準としつつも目の前の個々の子どもに即した成長・発達の度合いに応じた学習課題をいかに構成するかである。

#### (g) ヒドゥンカリキュラムへの視野を

生涯教育にとって最も重要なのは学校教育のみでなく学ぶこと自体への志向性である。だが、学校での学習の多くは、文字通り「強いて勉める」ものとなり、学校終了を教育からの開放ととらえる人が少なくないのが現状ではないか。それゆえ、上記の課題を実質化するためには、教師の表現・態度・論調等のメタ・コミュニケーション、無自覚的に教授＝学習する価値・規範・信念、教師の意図とは異なる学び方への子どもの解釈志向やメタ・認知等のヒドゥンカリキュラムをも包摂した、教授－学習主体一場、各相互の間に創造されるトータルな過程としてのカリキュラムが構想されねばならない。

以上の観点を要約するに、生涯教育の視点からカリキュラムを構想するためには、①言葉、知識・情報、概念・理論の学習を、そのときどきにおける子ども自身の生活世界における規範・行動様式、理解・表現力、創造・価値判断力育成、の契機としてとらえ、そのためには、②言語の前提であり、知

の意味が生じる場である生活・経験と社会的文脈がセットになった学習が必要であり、そこでは、③教師は多様な教育要求と異質な学習主体に対し、地域教育力の積極的な開発による多彩な教授主体のコーディネーターとならねばならない。

#### (4) 社会科にとって生涯教育の視点とは

教科としての成立事情と特性を考えると、社会科は本来的に上記の課題を内在したものであることは明らかであろう。しかし、問題は設立当初の課題であった民主主義、平和、豊かさへの課題から、その上に民主主義であるために、平和であるために、豊かであるために生じる問題が重なってきたことである。換言すれば、近代人＝産業人の育成に対し、移動と定住の間にある生活者の育成が、現代社会が提起する生涯教育の視点からの社会科への課題である。さらに、このことは認識の対象である社会の質的転換により、従来の社会事象－認識、自然事象－認識という枠組の流動化と、新たな両者の分化・統合自体を対象とする社会認識の学習が急務であること。また、教科としての社会科以外に実質的に形成される社会認識への視野の拡大とその統合への視点が求められていると考える。

以上の点から、生涯教育の視点からのカリキュラム構想への課題とは、新たな社会状況における社会認識の教育の課題であり、その意味で当然、社会科はその中心教科とならねばならない。子どもの生活世界を構成する場を子どもの現実構成の様式の解明において把握すること。教室－学校外の教育力の開発・システム化による、教科等の学習の生活化、地域化への統合。これこそ、まさにソーシャル・スタディーズ（社会研究）としての社会科の本来の課題に他ならないと考える。しかし、そのためには、このような観点から、社会認識の教育としての社会科自体の再構成がなされねばならないであろう。

# 社会科学教育の理論と実践

教員養成大学・学部教官研究集会社会科学教育部会 編

編集代表

佐藤 照雄  
佐島 群巳  
星村 平和

東洋館出版社

## は し が き

本書「社会科教育の理論と実践」は、昭和60年度から3年間にわたって、文部省の後援を受けて開催された教員養成大学・学部及び附属学校教官を中心とする社会科教育の研究集会における成果をまとめたものである。

これと同様の研究集会は、他の教科や教育相談などの領域ではすべて終わっており、「社会科教育」が最後で、しかも戦後40年、教育改革が日程にのぼっている現時点で実施をみることとなった。本研究集会が、社会科教育はもとより、各教科の共通基盤ともいうべき教科教育学に関して、さらには、社会科の性格が、人間形成に直接的、多面的にかかわることにより教育の本質や在り方にも深く関係するという意味で、教育全般に関して今日的かつ将来にかかわる重要な意義をもつものとなる。

大学における社会科教育研究、つまり「社会科教育学」は、社会科教育全体の組織と機能を研究対象とするものであるが、研究のための研究ではなく、研究対象たる社会科教育の実践の場に「還元」され、「機能」され、社会科教育を前進させる「効果」をもつものでなければならない。教育学一般や、世の教育論議が、しばしば観念論、抽象論に堕し、そこにとどまるのに対し、教科教育学は具体的実践場面に根ざし、そこから「理論」を導き出し、それを再び「実践」の場で検証しつつ教育実践を高めるという「実学」的性格をもつものである。ここに、大学教官と附属教官との共同、教育現場と教育研究機関との密接な連けいが求められ、この観点からの共同研究を軸とした研究集会が企図されたのである。

この研究集会の運営にあたる世話人会によって3年間の運営の大綱が検討され、まず、会場校に、第1年目が兵庫教育大学、第2年目が静岡大学、第3年目が東京学芸大学があげられ、そして、研究の推進、研究集会の運営にあたっては、日本社会科教育学会、全国社会科教育学会、その他社会科研究

諸団体との連携、協力を密にし、広い基盤をもつ研究が展開された。

3年間を通しての研究テーマは、「社会科教育の研究——社会科教育の現状分析と将来構想——」とし、各年次の研究領域や研究課題の細部や重点化は各年次に世話人を中心に検討し、次のような一連の段階的年次研究が推進された。

#### 第1年次「社会科教育の現状と課題」

- ①小・中・高校における社会科教育の現状把握と問題点の抽出
- ②小・中・高校におけるカリキュラム検討。そこから、学習内容と学習方法の改善点とその方向を見いだす。
- ③大学における社会科教員養成カリキュラム及び養成方法の問題点、特に社会科教育法、教材研究の実態と教育実習の現状把握

#### 第2年次「社会科教育の課題の考察」

- ①地域社会、国家、人類世界についての理解とそれへの主体的かかわりを自覚させる学習内容の構成
- ②世界の一体化と教育の国際化に対応しうるカリキュラムの開発
- ③世界の社会科教育の現状、特質及びそれとの比較
- ④社会科教育研究の組織、機関の在り方
- ⑤大学における「社会科教育学」の性格、研究領域、研究方法の確立

#### 第3年次「社会科教育の課題解明と展望」

- ①第1年次、第2年次の研究成果の上に立って、小・中・高校の学習内容・方法の具体的改善策と新カリキュラムの作成
- ②大学における社会科教員養成の制度、内容の構想
- ③「社会科教育学」の今後の研究課題と推進策
- ④3年間の研究成果のまとめと研究図書の出版

以上の研究を通して、教育全体の中で、社会科教育の必要性と存在理由を

明らかにし、生活の場としての「全地球」と、生活集団としての「全人類」を視野に入れた学習内容とそれに応じた学習方法をつくり出していく。そして、社会科教育の全体像を研究対象とする実践教育学として独自の性格をもつ社会科教育の「学」としての確立を図り、それを再び現場の実践場面に反映させて、究極において、社会科教育の充実、発展を企図するものとなっている。なお、3年間の研究集会には、下記の世話人がその運営にあたった。

- 有馬毅一郎(島根大学)  
市川博(横浜国立大学)  
岩田一彦(兵庫教育大学)  
馬居政幸(静岡大学)  
梶哲夫(筑波大学)  
黒羽清隆(静岡大学)  
久利文男(香川大学教育学部附属坂出中学校)  
駒井健(岩手大学)  
阪上順夫(東京学芸大学)  
○佐島群巳(東京学芸大学)  
◎佐藤照雄(静岡大学)  
谷川彰英(筑波大学)  
谷本美彦(宮崎大学)  
次山信男(東京学芸大学)  
中村哲(兵庫教育大学)  
平田嘉三(広島大学)  
○星村平和(兵庫教育大学)  
三浦軍三(東京学芸大学)  
(◎委員長, ○副委員長)

また、この期間、文部省高等教育局大学課教育大学室の担当官はじめ、会場校の事務官の方々、そして実際の運営には会場校の大学院、学部の学生諸

君にいろいろとお世話いただいた。ここにあらためて感謝の意を表したい。  
最後に、本書の作成にあたって、執筆者各位はもとより、編集委員の先生方、東洋館出版社の編集担当中村哲夫氏には絶大ご協力をいただいたことをここに記し、心からの謝意を表する次第である。

昭和63年1月

世話人代表 佐藤照雄  
佐島群巳  
星村平和

目次

はしがき	1
I 社会科教育学の基本的課題	9
1 社会科教育学の原理的検討	9
2 社会科の教師養成と子ども論	15
3 あるべき「社会科教師論」とカリキュラム	20
4 社会科教師教育と社会科教育学の統合	26
5 教員養成カリキュラムの方法論的検討	31
6 社会科教育学と関連諸科学との関係	36
7 教師教育の実践的課題	40
8 日本の歴史的風土と「社会科」	45
9 社会科教師の資質と専門性	50
II 社会科カリキュラムの歴史的背景と展望	56
1 社会科カリキュラムの理論と実践	56
2 知識・科学を重視したカリキュラムの理論と実践	61
3 能力重視のカリキュラムの理論と実践	67
4 人間中心のカリキュラムの理論と実践	72
5 幼・小・中・高一貫のカリキュラムの構想	77
6 中学校カリキュラムの新構想	84
7 高等学校社会科カリキュラムの新構想	89
8 生涯教育の視点からのカリキュラムの構想	96

III 社会科教育の内容構成と諸問題	102	3 子どもの思考力を育てる授業	227
1 地域学習の意義と実践	102	4 授業における資料の活用	235
2 「生活文化」と社会科	107	5 思考力育成の学習過程と教材開発	240
3 環境・資源の認識と社会科	113	6 学習の個別化と授業	246
4 国際理解教育と社会科	118	7 自己学習能力を育てる社会科教育の在り方	253
5 平和と社会科	123	8 中学校・高等学校における「社会科」の評価の在り方	259
6 人権と社会科	128	9 社会的態度形成と授業	267
7 世界像と社会科	133	10 授業構成論	273
8 歴史像の形成と社会科	138	11 二つの社会科授業構成論の検討	279
9 民主主義の活性化と社会科	144	12 授業研究における小・中・高の教材・方法の研究	284
IV 教師教育における社会科授業の設計	150	VI 社会科における比較教育的検討	290
1 教師教育における学習指導案立案の方法	150	1 アメリカにおける社会科	290
2 教師教育における学習指導プログラム	156	2 イギリスにおける社会科	295
3 教師教育における実践的指導の研究	160	3 西ドイツにおける社会科	300
4 授業研究の方法と改善	166	4 フランスにおける社会科	306
5 授業分析の方法	177	5 中国における社会科	312
6 社会科授業設計の方法と実習	182	6 オーストラリアにおける社会科	318
7 社会科教育法におけるマイクロティーチングの実践と評価	188	7 比較教育的視点から見た社会科教育	324
8 保育内容「社会」と低学年社会科との関連	194	◆シンポジウム	330
9 教育実習における「教師教育」	200	◆研究経過	345
10 附属学校における「教師教育」の在り方	206	◆あとがき	355
V 社会科教育の授業構成と展開	213		
1 子どもの学習意欲を育成する授業	213		
2 問いと授業構成	221		